

# 東京多摩地区私国立中入試概況

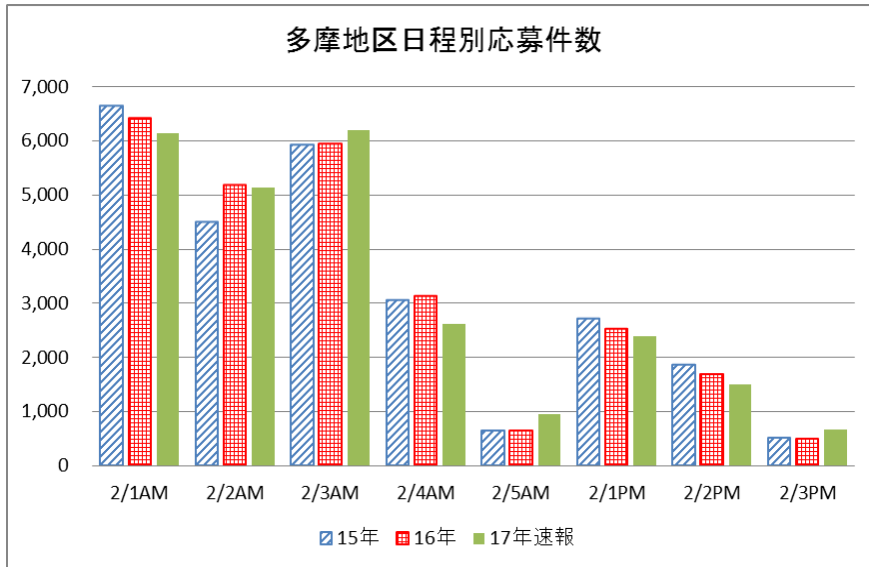
## 1. 概況 応募総数は小幅の増加が続く

今年の多摩地区の公立小6年生生徒数は約 33,600 名で昨年より約 700 名減少しています。昨年も減っていましたが、今年の方が減少の幅が大きくなっています。1 月までに実施される帰国入試を含めた、2 月 15 日現在の中学受験の応募総数は私立、国立、公立一貫校の合計で約 26,600 件です。昨年の最終を約 100 件上回りました。一部に入試結果未公表の学校や追加入試などがあり、今後その分が上乘せされますので、小幅ですが昨年に続く応募者数増加になります。

実際の受験者数も、昨年をやや上回るでしょう。

上のグラフは中学受験の各校の応募者数を日程別に集計して一昨年、昨年と比較したものです。私立、国立、公立一貫校の合計で、今年は速報値です。昨年よりも応募者数が増えているのは2月3日午前と、小規模ですが5日午前、3日午後だけで、あとはマイナスか昨年並みです。これで昨年の合計を僅かでも上回っているのか、という感じですが、グラフに表れていない2月5日午後に関東中野八王子が入試を新設、400名を超える応募者があったこと、1月までの帰国生入試がやや増えたため、合計では昨年以上を上回ったわけではあります。

第一志望校に挑戦する受験生が多い2月1日の午前の応募者数が減っていますが、本稿執筆時点で創価が応募者数も含めて入試結果を公表していない影響です。昨年並みの応募者数であれば、グラフは昨年以上を上回り、一昨年並みになります。固定ファンが多く、応募者数の変動が小さい同校ですから、1日午前は合計の応募者数が増えると思って差し支えないでしょう。1日午前の増加は、多摩地区の学校の人気を上向いている根拠になります。しかし、1日午後は昨年に続いての減少です。以前は、午後入試を「最後のすべり止め」的な選択で出願する受験生が多かったのですが、午後入



試校に魅力的な学校が増えて、第二志望として位置付ける受験生も増えてきました。しかし、同時に午前入試の学校から午後入試の学校へ移動するのも楽ではありません。23区と違って、駅から比較的距離のある学校が多い多摩地区ならなおさらで、午後入試を見直す動きが出てきたのかもしれない。

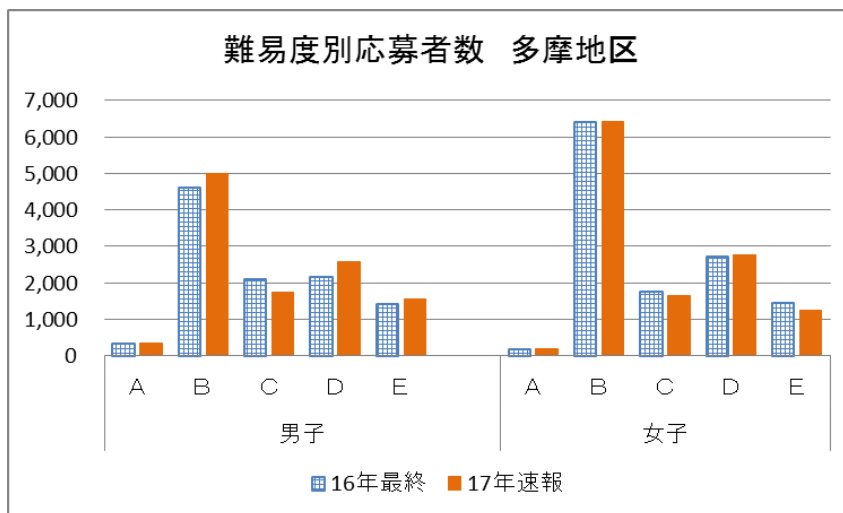
3日午前は応募者が増えています。3日は都立の中高一貫校の選抜日ですが、こちらは多摩地区の4校合計では応募者が減っていて、増えたのは私立の応募者が増えたからです。3日午前は都立の一貫校や国立の入試があり、これらの学校に挑戦する受験生はグラフの応募総数の半数程度います。あとの半数は私立中学受験生です。3日は有名大学の附属校など、人気校が高い学校の2回目の入試が多く、ぜひこうした学校に入学したい受験生が増えています。一方、2日午後や4日午前は応募者が減っていますが、こちらは、遅い日程までこだわって挑戦し続けようとする受験生が減っている影響でしょう。

今度は、難易度による志望校選択の傾向を見てみます。次のページのグラフは、各校の応募者数を難易度別に上からA～Eの5段階にグルーピングして合計し、昨年と比べたものです。グルーピングは各年の入試直

前の予想難易度をもとにして、毎年の受験生がどの難易度の学校をどれだけ希望しているかを表しています。公立一貫校は受験生の学力分布が幅広いため外しています。共学・別学校の応募者はそれぞれ男女別で集計し、男子校・女子校と合計していますが、男女別の内訳が未公表の学校は応募者数の半分ずつをそれぞれ男子・女子で合計しました。昨年は昨年用の予想難易度、今年は今年用の難易度を用いていますので、それぞれのグループに含まれる学校は、昨年最終と今年とは異なる場合があります。

Aグループは早稲田実業しかありません。グラフはすごく小さな値ですが、そのまま早稲田実業だけの応募者数ですので、少なくとも当然でしょう。今年は男女とも応募者がほぼ昨年と同数でした。B～Eグループでは、男子も女子もBグループが最多ですが、応募者数の規模が違います。このグループの男子校が桐朋1校なのに対して女子校は大妻多摩、吉祥女子、晃華学園と3校あることからこのような差になります。男子のBグループは昨年よりも応募者が少し増えていますが、有名大学の附属校や、昨年2回入試で応募者が大きく増えて、今年も増えている桐朋の人気です。C～EグループではCグループが減少、Dグループが増加、Eグループもやや増えています。23区ではDグループの減少が目立っていますが、多摩地区では人気が上がっています。

女子はBグループ集中が目立ちます。有名大学の附属に通いたい受験生が多いからで、応募総数の半数以上がBグループです。昨年との比較では、応募総数は昨年とあまり変わっていませんから、固定人気になっ



◎ 難易度別グルーピング

本資料集では出願動向の分析のため、各校の代表的な入試難易度で多摩地区私国立中を次のようにグルーピングしました。学校ごとの教育内容の優劣を表すものではありません。

- A…早稲田実業
- B…穎明館・大妻多摩・吉祥女子・晃華学園・成蹊・中大附属・帝京大学・東京学芸大小金井・桐朋・法政大学・明大中野八王子・明大明治
- C…桜美林・創価・東京電機大・明治学院
- D…共立女子第二・工学院大附属・聖徳学園(特待)・玉川学園・多摩大聖ヶ丘・東京純心女子・桐朋女子・日大第三・八王子学園・武蔵野女子学院(選抜)・明法(GE)
- E…桜華女学院・サレジオ(小平)・国立音大・啓明学園・駒沢学園女子・白梅学園清修・自由学園男子部・同女子部・聖徳学園(一般)・帝京八王子・東海大菅生・東星学園・八王子実践・藤村女子・明星学園・武蔵野女子学院(総進)・武蔵野東・明星・明法(一般)・和光

ていることがわかります。C～Eグループの応募者数はBグループよりかなり少ないのですが、Eグループがやや減っているほかは昨年並みの応募者数で、人気は安定しています。

以下、各校の入試状況を見ていきます。なお、都立の立川国際、南多摩、三鷹、武蔵高附属は、公立一貫校の概況をご覧ください。

2. 男子校・女子校

まず男子校から。昨年ついに2回入試に踏み切った桐朋は、人気が大きく上がって2回合計で応募者が1,000名を超える人気でしたが、2年目の今年も人気

続いていて、2月1日の1回、2日の2回とも少しずつ応募者が増えています。実際の受験者数も増えていますが、特に2回については、昨年合格者を絞りすぎた反省もあって、今年は増やし、実質倍率は下がっています。この関係で、昨年は2回が1回に比べて難化していましたが、今年は合格最低点も少し下がって1回に近い水準になっています。1回は昨年並みで、難度に変化は見られません。

明法はGEと明法の2コース制です。今年は2月2日午後のGE入試で4科を新設していますが、各回とも応募者が減って、小規模な入試になりました。特に明法コースが減っています。応募者が減る中でも、上位コースにはそれなりの人気が見られます。各回の合格者数が少ないことから、合格最低点は昨年と比べて上下変動のバラつきが目立っていますが、難度面では明法・GEとも昨年と大きく変わってはいないようです。サレジオ(小平)は今年も小規模な入試でした。

女子校では、吉祥女子は昨年、サンデーショックの戻りと鷗友学園が3回入試から2回入試になったことの影響を受けて、2月1日の1回の応募者がやや減少、2日の2回が増加、サンデーショックの戻りの影響があまりない4日の3回は目立って増加しました。特に3回は鷗友学園の影響が顕著で、同校から吉祥女子への受験生の流れが見られました。今年は落ち着き、各回とも応募者は少しずつ減っています。本来の同校の人気に戻ってきたと言えそうです。合格最低点は1・2回が昨年並み、3回は合格者を少し増やして倍率が下がったこともあって、少し下がって入り易くなっていますが、こちらも元に戻ってきたと言えるでしょう。

大妻多摩は、昨年は帰国生入試と、2月1日午前にグローバル対応の国際生入試(帰国生の基準に満たない帰国生中心)を新設、今年は2日にプレゼンテーション入試、4日に合教科型入試を、それぞれ従来の4科入試に並行して新設しました。急速に21世紀型教育に舵を切っています。昨年は2月2日の2回の応募者が若干増えたものの、他の回はやや減っていましたが、今年は1日午前の1回午前がほぼ昨年並みのほかは応募者が減っています。従来型入試で準備してきた志望順位が高い受験生は1回午前を受験しますから、他の回次は他校併願前提の受験生が多くなりますが、こうした受験生には、新タイプの入試や、急速なグローバル化対応は戸惑いを生んでしまったようです。合格

最低点は1回午後と2回は昨年並みでしたが、1回午前はやや下がり、4日の3回は目立って下がっていて、入り易くなっています。

カトリック校の晃華学園は一昨年3回入試から2回に移行、一昨年は当然のことながら応募者が減りましたが、昨年も2月1日の1回、3日の2回ともやや減っていて、敬遠ムードが見られました。今年は1回が昨年並み、2回は今年も減って、特に併願前提の受験生が減っています。しかし、合格最低点は1回が上昇、昨年の2回に近い水準で、少し難化しました。同校を高い志望順位で考える受験生に来てほしい、とする同校の施策が成功しているのでしょうか。2回は昨年も1回より高い合格最低点でしたが、こちらはあまり変わっておらず、応募者は減っても受験生が絞られた状態で、難度を維持しています。

このところ各回合計の応募者数の減少が続いている東京純心女子は、2月2日午前の入試を2科4科選択から適性検査型に切り替え、2日午後に2科入試を新設、さらに4日午前は2科から、聞く・書く・発信する、「タラント発見入試」としましたが、今年も応募者は減少傾向です。首都圏で中堅の女子校人気に陰りが出ていますが、その影響でしょう。入試の変更が多く、合格最低点の単純比較は難しいのですが、難度は昨年とあまり変わっていないようです。共立女子第二は一昨年まで各回合計の応募者数が少しずつ減っていましたが昨年はやや増えていて、今年は再び小幅ながら各回とも減りました。応募者の減少は人気は隔年的に変動するようになってきたのかもしれませんが、合格最低点は、合格者が少ない回次でやや上下変動にバラつきが見られますが、総じて難度に大きな変化はなかったようです。

武蔵野女子学院は選抜進学と総合進学の2コース制です。各回合計の応募者数は一昨年がやや減、昨年はやや増、今年はやや減と、隔年的に変化しています。人気の動きも隔年になってきたのでしょうか。選抜進学、総合進学の各回次の合格最低点も昨年並みで、難度に変化は見られません。桐朋女子は2月2日午後のB入試を3日午前に変更し、2日午前に記述型入試を新設しました。1日午前で、A入試として口頭試問を含む特殊な入試を続けている同校ですが、21世紀型学力観が口頭試問と類似点が多いことから、これを筆記に置き換えた形で新設したのが記述型です。各回合計

では概ね昨年並みの応募者数ですが、昨年のA・B入試の応募者が新設の記述型に流れたような結果です。実際の受験者数もやや減っていて、記述型の実施で新たに受験生が増えたとは言いにくい状況です。合格最低点が比較できるのはB入試だけですが昨年並みで、Aや記述型も不合格者が少なく、難度面は昨年とあまり変わっていないようです。

この他、桜華女学院、駒沢学園女子、白梅学園清修、藤村女子は、例えば藤村女子が2月5日に適性検査型を新設するなどの変更がありますが、いずれも今年も小規模な入試でした。なお、文華女子は募集を停止しました。

### 3. 男女校

付属カラーの強い学校から見ていきます。早稲田実業は、一昨年は男女とも応募者がやや増加、昨年は一昨年並みで、今年も昨年並みです。応募者数の変動幅は小さく、安定した人気です。合格最低点も男女とも昨年とほとんど同じで安定していますが、高難度ですから絞られた受験生による固定人気でしょう。明大明治は、このところ各回合計の応募者数が少しずつ減少していますが、今年も2月2・4日の1・2回男女とも少しずつ増えています。実際の受験者数も少し増えています。合格者は昨年並みしか発表していませんから、やや実質倍率が上がっています。合格最低点は1・2回男女とも昨年並みで難度に特に変化はなく、安定した入試でした。

系列校の明大中野八王子は2月5日午後4科総合型のB入試を新設しました。昨年は2月1日の1回、3日の2回とも応募者が減っていましたが、新設入試を歓迎した受験生が多く、既存の1・2回も男女とも応募者が増えました。実際の受験生も増えています。1回はB入試の新設に伴って定員が削減されていて、合格者が絞られて実質倍率は上昇、合格最低点が上がって難化しています。2回は受験生が増えた分、厳しい入試でしたが、合格最低点は昨年並みで、特に難化はしておらず、倍率上昇分だけボーダーライン付近が厳しくなった入試だったでしょう。新設のBは実質倍率15倍に達する激戦でした。出題がやや難しかったのか、合格最低点はあまり高い水準にはなりません。同校によると、このB入試は都立の中高一貫校との併願者も少なくなかったとのこと。都立の中高一貫

校と、大学受験を看板にする私立中学との併願は珍しくありませんが、「私立に行っても成績上位がキープできるなら難関大学受験、そうでなければ内部進学を」と考えていて、都立中高一貫校も受験する児童が実際にはある程度いることがこれで明らかになっています。

法政大学は、一昨年は概ね前年並みの応募者数、昨年は2月1日の1回が前年並み、3・5日の2・3回が増えていました。今年も2回の女子が少し増えた以外は昨年並みで、実際の受験者数もやはり昨年並みでした。人数面ではこのように安定した人気ですが、合格最低点は1・3回が少し上がっています。やや難化したかもしれません。2回は昨年並みでした。中大附属は、2月1日の1回のお誘いがやや減って3日の2回は増えています。1回は男子の減少が目立ち、女子はやや増加、2回は男子が昨年並み、女子は増えていますので、女子の人気が目立ちますが、この3年ほどは男女で逆の隔年的な増減が見られます。合格最低点は男女各回とも昨年とあまり変わっておらず、難度に変化はなかったようです。

成蹊は一般入試と国際学級入試を行っていて、さらに2月1日の1回に帰国枠を設定しています。昨年は国際学級の応募者が前年並み、1回と4日の2回は男女とも増えていましたが、今年も各回男女とも概ね昨年並みの応募者数で人気は安定しています。合格最低点は1回の女子が上がってやや難化、2回の男子は下がって少し入り易くなっていますが、1回男子と2回女子は昨年並みでした。独特な存在の創価は、本稿執筆時点で入試結果は未公表でした。

明治学院はプロテスタント系の学校ですが、昨年はサンデーショックの戻りの影響があまり見られず、各回とも応募者が増えていました。今年も2月1日午前の1回の男子は昨年並みだったものの、1回の女子と2・4日の2・3回は男女とも少しずつ減っています。一昨年は応募者が少しずつ減っていましたが、隔年的な人気の変化になってきたのかもしれませんが、実際の受験者数も対応して少し減っています。今年も本稿執筆時点で合格最低点が公表されていませんが、男女で実質倍率がアンバランスで、例年女子の合格最低点が男子よりも高いので、今年も傾向は変わらず、難度面では昨年並みだったようです。

玉川学園の各回合計の応募者数は、昨年は厳密には増えていましたが、昨年並みと言える水準でした。今

年は少し増えています。増加の中心は2月1日午後と2日午後で、他校併願前提の受験生が増えています。実際の受験者数もやや増えましたが、難化するほどではなく、難度面では各回とも昨年とあまり変わっていないようです。また、同校は国際バカロレアのコースを別途設置していて、今年は入試科目の選択が一部代わりましたが、その性質上、今年も小規模の入試でした。

東海大菅生は2月1日午後の適性検査型入試に、並行実施で2科4科選択も加えました。隔年的な応募者増減が見られる学校で、一昨年は各回合計の応募者数が増えましたが、昨年はやや減って、今年は増えています。実際の受験者数も増えています。合格最低点は、一部合格者数少ない回次で上下のバラつきが見られるものの、難度は各回とも昨年並みでしょう。帝京八王子の各回合計の応募者数は、小幅ですが隔年現象で変化していて、今年は順番通り増えました。増加の中心は2月1日午後、2日午後の入試で、他校併願の受験生の人気が上がったのでしょう。難度面では特に変化はなかったようです。

明星は昨年グローバルサイエンスコースを新設、従来のコースを本科として2コース制としました。今年は適性検査型や算数1科目入試を新設していますが、昨年、今年と新しい施策の告知が遅く、受験生にあまり浸透していません。昨年は一昨年に続いて応募者が減少、小規模な入試になりました。今年は各回合計の応募者数が大きく増えて小規模を脱した水準になりましたが、入試新設と複数回出願が増えたため、実際の受験者数はあまり増えていません。合格最低点も昨年並みで、難度は変わっていません。

独特な教育方針の和光は小規模な入試の学校ですが、今年は小規模ではあるものの男子の応募者がかなり増えています。難度面は例年並みだったようで、一定の力がないと合格できない入試でした。国立音大附属も、例年同様今年も小規模な入試です。

系列大学があっても付属カラーが薄い学校では、帝京大学は昨年まで少しずつ各回合計の応募者数が増えましたが、昨年は減少しました。今年は厳密には微増ですが、昨年並みと言ってよい水準です。実際の受験者数も微増で、合格最低点は2月1日の1回、2日の2回とも昨年並み、3日午後の3回はやや下がっていますが、目立って入り易くなったわけではなさそ

うです。桜美林はプロテスタント校ですが、以前から日曜日を気にしないで入試を行っていて、昨年も女子のサンデーショックの戻りの影響は見られませんでした。今年は2月1日午前に教科横断型の総合学力評価入試を新設、1回午前と並行実施としました。昨年まで各回合計の応募者数の減少が続いていましたが、今年は少し増えています。総合学力評価入試新設の効果もありますが、あまり大きくなく、もっぱら1日午後、2日午後の女子の応募者が増加の中心で、他校併願前提の女子受験生の人気が上がっています。合格最低点は、合格者が少ない回次で上下変動にバラつきが見られますが、難度に変化はなかったようです。

東京電機大は2月4日の4回を、午前から午後に移して、2科4科選択から、4科から得意2科目を選択する方法に変更しました。一昨年、昨年と、各回とも応募者がやや減っていましたが、今年も午後に変更になった4回以外は各回とも少しずつ応募者が減っています。4回は特に男子が増えました。実際の受験者数も同じ傾向です。合格最低点は、一部合格者が少ない回次や科目選択で上下変動のバラつきが見られるものの、概ね昨年並みで、難度に変化は見られません。応募者の減少傾向も受験生が絞られた結果です。

日大第三は、以前は3回入試の学校でしたが、段階的に2回、4科のみに移行しました。しかし、受験生の減少が大きく、昨年から2科4科選択と3回入試を復活しています。これを歓迎する受験生が多く、各回男女とも昨年に続く応募者の増加で人気が上がっています。特に2月2・3日の2・3回は欠席率が大きく下がり、実際の受験者数は合計で昨年の1.5倍を上回りました。合格最低点は1日の1回はやや上がった程度ですが、2・3回は大きく上がり、難化しています。涙をのんだ受験生が増えました。

多摩大聖ヶ丘は2月1日午前と5日午前入試を4科のみから2科4科選択としたほか、2日午前を適性検査型のみとし、3日午前に2科4科入試を新設、2科受験生への受験機会を増やしました。昨年は各回合計の応募者数がやや減ったものの、実際の受験者数は一昨年を上回っていましたが、今年は逆で、合計の応募者数は増えたものの、実際の受験者数は少し減っています。2科受験生が増えて、出願のパターンが変わったようです。合格最低点は各回とも昨年並みで、難度に目立った変化は見られませんでした。

工学院大附属はハイブリッド特進、ハイブリッド特進理数、ハイブリッドインターの3コース制とし、国際バカロレアも視野に入れた教育内容に変更しました。各回合計の応募者数は、一昨年は安定していたものの、昨年は減っていましたが、今年はやや増えています。帰国入試を新設していますが、2月1日からの一般入試でも帰国生が増え始めました。実際の受験者数は応募者数の増加よりも少し多く、欠席者も減っています。合格最低点は、思考力入試や合格者が少ない回次で一部変動にバラつきが見られますが、概ね昨年並みの難度だったようです。

純然たる進学校では、穎明館は一昨年、昨年と、各回合計の応募者数が少しずつ減っていました。実績のある進学校ですが、都心部の進学校を目指す流れの影響が出ていました。今年は2月2日の2回の応募者が少し増えて、1日と4日の1・3回は昨年並みです。実際の受験者数も増えました。合格者はほとんど増やしていませんから、倍率が少し厳しくなっています。各回とも合格最低点は上がっていますが、あまり目立つほどではなく、受験生の学力層が少し上がってきたと考へた方がよさそうです。八王子学園は昨年、東大医進コースを新設、一貫特進コースとの2コース制です。昨年は東大医進コース対象の適性検査型も新設しています。昨年は各回合計では一昨年並みの応募者数でしたが、今年は増えました。増加の中心は適性検査型と1日午後の東大医進コース入試です。新コース制や適性検査型入試が受験生に浸透して、上位コース志向の受験生が集まりました。実際の受験者数も大きく増えています。各回とも合格最低点は昨年並みで、特に難化はしていません。

聖徳学園は2月1日午後、2日午後の、特待入試と並行実施している一般入試を廃止して特待入試のみと

し、2月4日午後は特待・一般入試とも取りやめて2日午前、3日午前、5日午前に一般入試を新設、10日の思考力入試を2日に繰り上げて一般入試と並行実施としました。昨年まで各回合計の応募者数が増えていましたが、昨年は一昨年並み、今年は減っています。実際の受験者数は昨年も増えていて、欠席率が低下していましたが、今年は実際の受験者数は小幅の減少に留まって、欠席率低下傾向は続いています。入試の大きな変更も、「受験しない出願」を減らす策だったようです。入試変更の規模が大きいので合格最低点の単純比較は難しいのですが、難度は特待、一般とも昨年とあまり変わっていないようです。

独特な教育方針の明星学園は、昨年まで小規模の入試でしたが、2月1日午前、2日午後、4日の入試の男子の応募者の増加が著しく、各回合計では小規模な入試とは言えない水準に増えています。女子も各回合計では増えています。男子ほどではなく、男子の人气が上がっています。実際の受験者数でも男子の増加が目立ちました。ただ、同校が学力的にやや厳しい男子受験生が多かったようで、女子に比べて男子はかなり高い実質倍率です。合格最低点は例年公表しない同校ですが、いくら受験生が増えても基準点に達しないと合格させない姿勢が色濃く表れた入試でした。

国立の学芸大小金井は、一昨年、2科から4科に変更して男子の応募者が少し減り、昨年は男女ともやや減っていました。4科に変更した影響でしょう。今年は男女とも増えていて、人气が戻ってきました。少し難化したかもしれません。

この他、独特な教育方針の武蔵野東、東星学園、八王子実践、啓明学園、自由学園は今年も小規模な入試でした。

※本概況は、2017年2月15日までに回答のあった学校アンケートに基づき作成しています。2月15日以降変更等ある場合がありますので、ご了承ください。